



Title	<書評論文>E. アクトン著『ロシア革命再考』を読む
Author(s)	池田, 嘉郎; Ikeda, Yoshiro
Citation	スラヴ研究, 42, 161-170
Issue Date	1995
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/5240">https://hdl.handle.net/2115/5240</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	KJ00000113394.pdf



[書評論文]

## E. アクトン著『ロシア革命再考』\* を読む

池田嘉郎

欧米でのロシア革命研究は、自律的に考えて行動する民衆が研究対象に取り上げられるようになった1960年代に、大きく変化した。それまでの歴史家は、国家の指導者とその政策に関心を集中して、民衆にはあまり目を向けてこなかったか、あるいは、彼らを受動的な存在としてのみ取り扱ってきたのである。この変化を担ったのは、本書でリヴィジョニストと呼ばれる研究者たちであった。本書はロシア革命研究の伝統的な諸潮流との対比の中で、リヴィジョニストの研究の長所を明確にえがきだすことに成功している。だが、リヴィジョニストによる「下から」の考察は、それ自体で完結すべきものではない。そこで得られた新しい事実解釈を、長期的展望の中に置き直すことが必要なのである。リヴィジョニストの立場からロシア革命の研究史を再検討した本書は、こうした問題のもつ意義を軽視している点で、リヴィジョニストの研究が一般にもつ短所を共有していると言えよう。

ロシア革命研究の伝統的な諸潮流として、本書ではソヴィエト史観、リベラル史観、リバタリアン(libertarian)史観の三つが挙げられている。ソヴィエト史観は、階級闘争を中心概念とした歴史の発展法則に基づいて、ロシア革命の必然性を主張してきた。一方、リベラル史観は、革命前ロシアは西欧型の自由主義的民主主義社会へと進んでいたものであり、ロシア革命はそうした道からの逸脱であると考え、リベラル史観においては階級闘争の意義よりも、社会の諸理念、文化、宗教が、社会的、政治的発展の上でもっている役割が重視される。また、リベラル史観では政治的リーダーシップが決定的であり、民衆の役割は従属的でしかない。そこではロシアの社会的、経済的発展よりも、革命に先行する政治的、イデオロギー的状况におもな注意が向けられてきた。

アクトンが指摘しているとおり、この二潮流の成立と展開を、冷戦状況の存在から切り離して考えることはできない。すなわち、ソヴィエト史観はソ連の体制の正統性を擁護することにつとめてきたのであり、リベラル史観は逆に、ロシア革命を少数の狂信的な知識人のしわざとしてとらえる、西側の伝統的な革命観の基礎となってきたのである。他方、ソヴィエト史観による革命研究の「正統性」の独占に反発して生まれたという点で、リバタリアン史観もまたこのような状況と無縁ではない。リバタリアンとは、第二次大戦後、左翼の間でソ連の威信が低落し、「新左翼」が成長する下であらわれた、急進的な歴史家の総称である。ソヴィエト史観にとって「自然発生的」であり、リベラル史観にとっては無思慮なものである民衆のプロテストは、リバタリアン史観にとってはまさに歴史の本領な

\* Edward Acton, *Rethinking the Russian Revolution*, London, Edward Arnold, 1990, [viii]+229 pp.

のである。民衆の自律性を強調する点では、彼らの研究にはリヴィジョニストに通じるものもあった。しかし、民衆の自律性を強調するあまり、インテリゲンツィアや諸政党に対する彼らの評価は、やはり先入観を伴うものとなっていた。

したがってアクトンが整理したこの三潮流は、それぞれのイデオロギー的先入観にとらわれている点で共通していると言えよう。リヴィジョニストの第一の長所は、こうした拘束衣からの脱却をはかったことにある。リベラル史観を批判することは、共産主義の支配を容認するのと等しいことではないと、東西の緊張緩和を背景にして彼らは考えはじめたのである。もっとも、ここでアクトンがE.H. カーの業績について何らふれていないのは問題であろう（参考文献リストにおいて、いくつかの点でリヴィジョニストの仕事の前触れとなった、とされてはいるが）。イデオロギーにとらわれないカーの研究姿勢は、個々の行動主体の行為や考えを、より当事者の視点に即して考察することを可能にした。リヴィジョニストはカーのこの姿勢を受け継ぎ、かつカーが詳細な研究をおこなわなかった1917年に焦点をあてたのである。

だが、リヴィジョニストの研究がもつ一番の重要性は、ほかのところにある。カーの最大の関心はポリシェヴィキ国家のもつ歴史的意義ということにあったから、その視点はなかば必然的に、ポリシェヴィキ政府の政策にはじまる「高等政治」におもに向けられていた。これに対してリヴィジョニストは、自律的な存在としての民衆に関心を向け——その結果、1917年の革命状況自体が再検討の対象になってくる——、ロシア革命に対する「社会史的な」アプローチを採用したのである。この点にこそ、リヴィジョニストの研究の独自の意義があると言えよう。アクトンは、リヴィジョニストのおもな考察領域を四点にまとめている。彼らは第一に、革命を「下から」研究し、「高等政治」の世界の下にある工場、農村、兵舎、塹壕にまで視野を広げた。第二に、一般の人々が政治上の展開に及ぼした影響を考察の対象とした。第三に、革命の社会的側面の研究と相互補完的に、経済史や政治史の研究もおこなわれ、革命前ロシアの経済発展や、帝政国家、臨時政府、諸政党の構造と政策などについても再検討がなされた。第四に、「十月革命」までの状況とその後の間の、深い不連続性にも焦点があてられた。

個々の行動主体の行為や考えを当事者の視点から検討し、かつ自律的に存在する民衆を重要な考察対象とすることによって、リヴィジョニストは1917年の諸問題について、伝統的な諸潮流よりもはるかに説得力をもつ分析をおこないえた。とくに、臨時政府や穏健社会主義者のように、従来もっぱら否定的な評価をこうむってきたものの再検討において、リヴィジョニストの長所ははっきりとあらわれている。それらの挫折は、リベラル史観のように当事者の無能力や、ソヴィエト史観のように階級闘争に基づく必然によってではなく、当事者なりの合理的判断と客観的条件の課す制約の間の相互関係、さらに当事者と民衆の間の相互関係によって説明される。アクトンは諸潮流との比較の中で、リヴィジョニストの研究がもつ長所をあざやかにえがきだしている。以下では具体的に見てみよう。

帝政政府の崩壊に際してペトログラート・ソヴィエト指導部は、ドゥーマの指導層が新政府をつくるべきだと考えた。リベラル史観はこれを、ブルジョア政治家が権力を取らねばならないというメンシェヴィキの教条主義から説明し、ソヴィエト史観は、民衆の革命的熱意を恐れた穏健社会主義者が、故意に権力掌握の機会を放棄したと説明する。だがり

ヴィジヨニストによれば、当初ソヴィエト執行委員会の主導権を握ったのは、穏健派ではなくメンシェヴィキ国際主義者であり、彼らの多くはヨーロッパ革命の接近を確信していた。しかし、彼らは前線からの介入を危惧しており、ミリュコフたちに（一方でその行動の自由を慎重に制限しつつ）組閣を促すことで、ブルジョアジーを革命の側に縛りつけようとしたのである。ソヴィエト総会がほぼ全員一致で臨時政府への条件つき支持を承認したことは、反革命に対する恐怖が首都の労働者（多くのボリシェヴィキを含む）にも共有されていたことを示しているのである。

臨時政府の「失敗」について、リベラル史観は臨時政府のメンバーが政治的に不適格であったことを、ソヴィエト史観は臨時政府がブルジョアジーと地主の利益を擁護していたことを、それぞれ最重視する。これに対してリヴィジヨニストは、臨時政府の政策の形成過程を分析することによってその一定の合理性を明らかにし、また事態の展開を下から見ることで臨時政府の活動に課されていた限界を検討した。

たとえば行政上の改革に関して、リベラル史観は、臨時政府が県知事——中央権力の地方での主要エージェント——を解任して、統治経験も権威もない県参事会議長を県コミッサールに任命したことを、その現実把握の乏しさの典型例としている。だがリヴィジヨニストによれば、そもそも県知事解任は不可避であった。他方、農民の間では県参事会議長を県コミッサールに任命したことは不評であったが、そこには地方行政が民主的に改革されるまでは、これ以上の行政上の変化を延期したいという臨時政府の所望が反映されていたのである。また、リベラル史観とソヴィエト史観が、武力の使用に対する臨時政府の消極性と積極性をそれぞれ強調するのに対して、リヴィジヨニストは武力行使の可能性自体が著しく限られていたことを示した。すでに「二月革命」の時点で、より急進化した守備隊部隊はもとより前線部隊でさえも、持続的に治安維持のために用いることはできなくなっていたのである。

臨時政府の運命にとって、戦争の問題は決定的である。なぜ臨時政府は戦争から身を引くことができなかつたのか。その理由としてリベラル史観は、自由主義者の間での民族感情の強さ、連合国との協定の存在、ドイツの覇権に対する臨時政府の危惧を挙げ、ソヴィエト史観は臨時政府が資本の利害を代表していたことと、体制側にとって革命的状況に対抗するために戦争の勝利が必要であったことを指摘する。これらすべての要因を優劣つけがたいとみなした上で、リヴィジヨニストはさらに、上・中流階級の戦争に対する支持が広範で熱烈なものであったことを明らかにしてきた。穏健社会主義者はソヴィエト史観が認めているよりも熱心に平和を追求したが、政策決定に対する彼らの影響力は限られていた。また、いずれにせよロシアは、連合国に講和を説得するための手段を欠いていたのである。

穏健社会主義者の「失敗」についてはどうか。リベラル史観は、「二月革命」はブルジョア革命であるという信条が、穏健社会主義者を縛っていたと主張する。だが、リヴィジヨニストによれば、彼らの追求しようとした政策の急進性（たとえばエスエル党の土地政策、メンシェヴィキ経済学者の経済統制計画）が示しているように、穏健社会主義者は、ロシアの「客観的条件」は高度の社会的、政治的变化を可能にしているという考えを受け入れていたのである。他方、ソヴィエト史観は、穏健社会主義者はブルジョアジーとプロレタ

リアートの間引き裂かれていたので、その失敗は必然的であったと考えている。だがソヴィエト史観自体が認めるように、穏健社会主義者が有産層との連立を解消する機会は何度もあった。したがって、なぜ穏健社会主義者は「進歩的」有産層との連合による政策の実現を、必要かつ可能と考えたのかが決定的な問題となる。

リヴィジョニストによれば、穏健社会主義者の行動は、反革命への危惧とともに、戦争の問題によって規定されていた。彼らは単独講和を度外視していた。なぜなら、第一に単独講和は、ヴィルヘルムのドイツに勝利をもたらすであろう。第二に単独講和は、それに反対する進歩的自由主義者と社会主義者の対立をもたらし、右翼を利することになるであろう。こうして単独講和を否定した上で、彼らはさらに、純粋な社会主義者政府では、戦線維持のために必要な連合国と軍将校の信頼を得られないであろうと判断したのである。

実際、カデット党に対する穏健社会主義者の幻滅は、時とともに強まった。だが彼らは中産階級のうち最も「進歩的な」人々を、カデット党抜きでの連立に引き込むことに失敗した。その一方で、カデット党の非妥協的な態度が強まるにつれて、内戦と反革命の危険は高まるだけのように見えたし、単独講和はなお問題外であったので、穏健社会主義者はソヴィエト政府という考えに抵抗し続けた。彼らは袋小路に陥ったのである。

リヴィジョニストの研究がもっている長所は、ポリシェヴィキ党の権力奪取を評価する際にも同じように示されている。まずは、民衆の行為と考えをどう評価するかが問題となる。ソヴィエト史観はポリシェヴィキが民衆の意識を高めたと主張し、リベラル史観は民衆の行為を無知で非合理的なものと考えてきた。これに対してリヴィジョニストは、リバテリアン史観と同様、労働者、農民、兵士は、自分たちの目標を自律的かつ合理的に追求したと考える。1917年の政治的帰結に関して言えば、食糧配給、経済再建の調整、講和締結といった課題の解決には、村委員会、兵士委員会、工場委員会よりも広範な組織形態が必要となった。このため民衆は、臨時政府とその地方機関から、より広範な能力をもつソヴィエトへの権力の移行を求めるようになり、社会主義政党のうちの臨時政府派ではなくソヴィエト政府派を、急速に支持するようになったのである。

ポリシェヴィキへの支持の増大について、リベラル史観は、諸民衆機関においては執行機関への権力集中の傾向が見られ、そこに座を占めた活動家によって機関全体が操作されたことを指摘する。しかしリヴィジョニストによれば、そうした傾向は諸民衆機関のヒエラルキーの上部で最も強く、1917年においては穏健社会主義政党の方が、この傾向からより多くの利益を得ていたのである。一方、諸民衆機関のうち「官僚化」の度合いがより低かった草の根レベルにおいてこそ、ポリシェヴィキは最も強力に支持されていたのである。

1917年のポリシェヴィキ党について、リベラル史観もリバテリアン史観も、知識人中心の、緊密に結ばれた中央集権的組織という像を共有している。また両者はともに、ポリシェヴィキは民衆の願いを追求していると偽ることにより支持を獲得したと考える。だがリヴィジョニストは(この点ではソヴィエト史観が主張するように)、1917年のポリシェヴィキ党においては労働者が過半数を占めており、知識人は少数派であったことを確証した。また、ポリシェヴィキ党の中央組織と地方組織の相互連絡、上部組織の下部組織に対する統制は、ともに不十分であった(この点ではソヴィエト史観と対立する)。さらに、民衆世

論の変化と諸地域での政治状況の変動に対する鋭い感応が、ポリシェヴィキの支持増大の鍵となっていたが、これは一般党員が政策形成に下から影響を及ぼしえたからこそ可能になったのである。

リヴィジョニストの研究に照らせば、「十月革命」もリベラル史観の言う陰謀的なクーデター以上のものとして現れる。ソヴィエト権力に対する民衆の支持こそが、ケレンスキーと臨時政府の運命を定めたのであり、また新秩序への武力抵抗が容易に打ち倒されたのもそうした支持があったからである。同様に、ソヴィエト政府という考えに対する穏健社会主義者の反対こそが、「十月革命」までに彼らを無力にしたのである。

ここまで見てきた叙述にも示されているとおり、本書ではソヴィエト史観とリベラル史観は、リヴィジョニストの観点からもっぱら批判される存在としてのみ扱われている。まず、ソヴィエト史観については、そのイデオロギー的限界は明らかであり、本書での扱われ方も十分に理解のできるものである。もっともそうであればこそ、ソヴィエト「史観」ではなくて、叙述のありかたを含む総体としてのソヴィエト「史学」がもつ、肯定的側面に目を向けることが大事になるということは言うておかねばなるまい。そもそも両者は別々に考えられるものではない。ソヴィエト史観という公式見解の枠にもかかわらず、あるいは枠があったからこそ、ソ連の歴史研究における事実の叙述そのものや個々の分析には、われわれが注意を払うべき示唆が含まれていたと言えるのではないか。偏向があったにせよ、史料の幅広い利用、およびそれに対する熱意という点で、ソ連の歴史研究がもたらした成果は重要である。さらにソヴィエト「史観」自体も、包括的な体系であるという一点において強みをもっていた。この問題についてはまた後で立ち返る。

リベラル史観についてはどうであろうか。本書ではその主要な特徴がいくつか挙げられている。だが、著者がリベラル史観としてまとめているものは、そうしたいくつかのメルクマール以外の点では、本書に示されたよりもずっと幅広く展開してきたと言えよう。たとえば、中央集権的で緊密に結ばれたポリシェヴィキ党組織という「神話」がある。こうしたポリシェヴィキ観はソヴィエト史観、リベラル史観、さらにリバテリアン史観にも共有されていたものであるが、これを批判したのはキープやペスイブリッジ——ともに本書ではリベラル史観の研究者に分類されている——といった研究者たちであった<sup>(1)</sup>。

リヴィジョニストの研究に対する批判が本書の中にほぼ見られないのは、伝統的な諸潮流によってもたらされたロシア革命像の歪みをただしたいという、著者の意図のあらわれであろう。しかし、リヴィジョニストの研究にしても、何の問題もはらんでいないということはいえない。思うに、リヴィジョニストの長所である、それぞれの行動主体の視点に即した研究は、もろもろの事実や個々の事態の展開の意味をとらえるのには適しているが、それ自体からはある大きな出来事全体、あるいは長期にわたる時代のもつ歴史的な意味を知ることはできないのである。本書がまとめたリヴィジョニストの諸見解からは、個々の行動主体がそれぞれ自分なりに合理的に行為したこと、それにもかかわらず社会的対立は克服されえなかったこと、その結果としてポリシェヴィキが権力を獲得するようになったことは理解できる。だが、全体としての1917年が歴史上どのような位置にあるのかについては、本書の叙述は答えようとしていないのである。これは著者アクトンの責任である

とともに、リヴィジョニストの研究が少なからずもっている傾向のためでもある。つまり——これは自戒をも込めて言うのであるが——リヴィジョニストの研究には、グランド・デザインをもとうとする志向が、必ずしも強くはなかったのではないか<sup>2)</sup>。(アクトン自身、リヴィジョニストの仕事には「全面的な総合」がなお必要であると述べてはいる。だが、こうした認識は本書の叙述には反映されていないのである。)

内容の是非はともかく、ソヴィエト史観には、革命へ向かってのロシア社会の必然的な発展と、前衛党としてのボリシェヴィキ党による権力獲得、リベラル史観には、西欧型民主主義に向かつてのロシア社会の発展と戦争によるその挫折、ボリシェヴィキ党による陰謀的な権力奪取という、それぞれの長期的展望があった。両者が長期にわたってかなりの影響力を行使できたのには、こうしたグランド・デザインの存在が大きな役割を果たしている。また、リバタリアン史観も、アクトンがまとめているように、インテリゲンツィアの歴史的 position という限られたテーマに関してではあるが、彼らなりの長期的展望をもっていた。それによれば、革命家は労働者や農民をではなく、資本主義の成長が生み出した新しい階級、インテリゲンツィアを代弁していた。19世紀なかば以降、雇用機会に対するインテリゲンツィアの過剰状態がつねに存在するようになった。その結果、彼らは自分たちの能力に十分な機会と評価を与えることのできない政治秩序と社会秩序に対して、批判的になったのである。それでも、インテリゲンツィアの大半は既存の秩序と妥協したが、急進的な層はそれを拒否した。彼らは一般に価値を認められた専門家(すなわち彼ら自身)の引いた、合理的ラインに沿って運営される社会を夢見て、そのような社会を「社会主義」社会と呼んだ。だが革命的なインテリゲンツィアは、変革を実現するための自前の力をもたなかったため、民衆の動員を追求したのである。

たしかに、リヴィジョニストの研究にグランド・デザインがまったく欠けていたというわけではない。本書の叙述の中でも、「戦争前のロシア：『法則にかなった革命』カリベラル的發展か？」という章で、リヴィジョニストのグランド・デザインが提示されているのを見いだすことができる。ここでは第一次大戦以前のロシア社会に関して、ソヴィエト史観とリベラル史観の上記の長期的展望が、リヴィジョニストの長期的展望によって批判的に再検討されている。だが、そこで示されるリヴィジョニストの長期的展望、すなわち「大戦前のロシア社会においては社会的不安定性が高まりつつあった」というテーゼは、1917年のもつ歴史上の意味を問う上で多くの問題をはらんでいるのである。そして著者アクトンもまた、このテーゼを無批判的に受け入れることによって、その問題性を看過してしまっている。

まずはこの章の内容を概観しよう。第一に農民について。リベラル史観は、1905年後の改革が、農村に社会的安定をもたらすことを約束したと主張する。だが、リヴィジョニストによれば、1905年に先立つ数十年、農民の平均生活水準は上昇していたことがうかがえる。それゆえ、1905年に見られた農民の戦闘性は彼らの全般的な貧困に由来しているのではなく、減税や払い戻し金の廃止は農民の態度を変えなかったであろう。また、技術革新の多くが共同体の支配的な地域でなされたことを考えれば、共同体の解体それ自体が農業発展に大きな刺激を与えるという見解にも、疑問が生じる。さらに、農民経営の商業化はストルィピン改革よりも前の時期から農民の階層分化を促進してきたが、それは1905年に

貴族に対する農民の攻撃を緩和しなかった。

第二に労働者階級について。リベラル史観は、戦争に先立つ時期に労働者のプロテストの激しさは低下しつつあったと主張してきた。だがストの数、性質の双方から見て、リヴィジョニストはソヴィエト史観の見解に同意する。つまり、ロシアでは産業資本主義の発達は、プロレタリアートの間で改良主義を促進するよりもその急進化を強め、政治的自覚をもったプロレタリアートを育成したのである。だが、ロシアの労働者階級が、西欧の例と異なって戦闘的であり続けたのはなぜなのか。リヴィジョニストによれば、それは労働者層への農民の急速な流入やポリシェヴィキの影響といったことよりも、帝政ロシアの政治環境に由来している。そこでは労働組合やストライキは厳しく制限されていた。またドイツ社会民主党のように、現状の維持ということに利害関係をもつ、改良主義的な政党の出現も妨げられていた。したがって、ロシア労働者階級の改良主義的な発展の展望は、政治体制の自由主義化の展望にかかっていたのである。

第三に中産階級について。リベラル史観は、政治体制の自由主義化は進行していたと考えてきた。リヴィジョニストによれば、たしかに戦争に先立つ時期、中産階級は経済的、社会的には成長した。しかし、体制側の非妥協的な姿勢に直面した際、自由主義者は政治的には無力であった。その理由としてリヴィジョニストは、ソヴィエト史観同様、彼らが民衆に訴える能力も意志ももたなかったことを挙げる。だが、ソヴィエト史観がこうした自由主義者の弱さを、革命に対する彼らの恐怖のみから説明するのに対して、リヴィジョニストはロシア中産階級の深い分裂（経済的、地域的、民族的、文化的）をも強調する。リヴィジョニストの研究に照らせば、自由主義者の窮状は解決不可能であったように見える。非力なドゥーマへの依拠は有効ではなかったが、入閣という右コースをとれば体制の人質になる恐れがあったし、民衆に訴えるという左コースをとれば、革命的対決の中でマージナルな存在へと追いやられてしまう恐れがあったのである。

第四にニコライ二世の役割について。リベラル史観は、ロシア社会の発展を展望する際に、皇帝個人の資質を重視する。だがリヴィジョニストによれば、ニコライ二世が自由主義的改革に抵抗したのは、彼個人の資質にかかわる偶然ではない。専制原則を中心とした彼の価値観は、意図的な教育と儀礼の結果もたらされたものであった。また、立憲的改革も大規模な社会改革も、彼の専制権力を脅かすものであった。くわえて保守勢力も、皇帝に強力な圧力をかけていた。他方、別の皇帝の下でなら旧来の体制を維持しえたとも考えがたい。そのような維持の試みこそが1905年の革命を引き起こしたのだし、また1907年の徹底的な選挙法改正も、ドゥーマに右派の安定多数をもたらせなかったのである。さらに、社会的統制手段としての軍の信頼性も崩れつつあった。

第五に戦争について。ロシアの国内条件と無関係な、「青天の霹靂」としての第一次大戦がロシア社会の本来の発展を歪めた、というリベラル史観の見解は、リヴィジョニストにとっては不自然なものである。一方、ソヴィエト史観では、第一次大戦は帝国主義の時代における資本主義国家間の競争の不可避の産物とされる。だが、経済的原因は大戦の多様な原因のひとつにすぎない。リヴィジョニストは参戦国の社会—政治構造とその外交政策との相互関係に関心を向けてきた。ロシアにおいては、外交問題が皇帝の個人大権に属していたことで、外交機関、政府、軍部で混乱が生じた。さらに、日露戦争以降の外交上の

一連の敗北が、対外問題に関する公衆の不満を引き起こしていた。ロシア政府は、参戦回避がその威信に与えるであろう打撃を受け入れられる程の信頼と権威を、すでにもっていなかったのである。

このようにしてアクトンは、「大戦前のロシア社会においては社会的不安定性が高まりつつあった」というリヴィジョニストのテーゼが、ソヴィエト史観とリベラル史観、とりわけ後者の見解に比べれば説得力をもつことを示してきた。しかし、1917年に関してこのテーゼから得られる結論は、ロシア革命（「二月革命」も「十月革命」も含めて）はロシア社会の「本来の」展開からの逸脱ではなく、その自然な帰結であった、ということのみである。この結論は1917年以降の事態の展開について、まったく説明を与えていない。この点でこのテーゼは、ソヴィエト史観とリベラル史観のもつ展望よりも、有効範囲が限られていると言えよう。さらに、より重要なこととして、そもそもこのテーゼに基づいておこなわれる1917年の考察は、どこまで妥当性をもっているのだろうか。

大戦前のロシア社会における不安定性の高まりを強調することは、深い社会対立の存在を最大の基準にして1917年の過程を説明することに、直接つながっている。こうした強調は、大戦前のロシアは西欧型民主主義へ向かうコースをたどっていたのであり、第一次大戦の勃発がその「自然な」発展を歪めたのである、というリベラル史観の見解に対する批判の側面を強くもっていた。評者もリベラル史観のこうした見解には同意できない。だがそれにもかかわらず評者の考えでは、1917年における諸事件の展開を最も決定的に規定していたのは、社会対立の深さではなくて、やはり戦争の問題である。たとえば、本書ではペトログラート守備隊の兵士が帝政政府を崩壊させる上で果たした役割は、せいぜい労働者と同等にしか見られていない。しかし労働者の行動がいかに激しかったにせよ、守備隊兵士が確固として体制の側についていたならば、二月の帝政崩壊はありえなかったであろう。そして、国家の指導層の戦争遂行に対するいいかげんな（と彼らには思われた）態度が、兵士の間で体制への忠誠心を失わせたという点において、守備隊兵士の反乱は戦争の問題と切り離しては論じえない。

たしかに「二月革命」の時点で深い社会対立がすでに存在していたことは、「二重権力」の成立が如実にあらわしている。だがこの対立は、「臨時政府に対する条件つき支持」というかたちで制御しうる程度のものであった。この「二月革命」体制が維持しえなくなっていたのは、四月事件にはじまる一連の政治的危機が、二月の時点とは比較にならぬほどに社会対立を深刻化させていったからにほかならない。そしてコルニーロフ反乱を頂点とするこれらの政治的危機は、戦争の問題に直接関連するか、あるいは戦争（と革命的状況）がもたらした経済的混乱に関連していたのである。さらに、「ソヴィエト権力」という概念が全国の労兵ソヴィエトで強力な支持を得たことも、戦争の問題を抜きにしては理解できないであろう。と言うのは、経済的混乱に対する統制機関としてのソヴィエトという観念が、ソヴィエト活動家および労働者・兵士の間が存在したことが、「ソヴィエト権力」が支持された大きな要因であったと評者は考えるからである。

したがって、1917年の経過を大戦前ロシアの社会的不安定性の問題から考えること、すなわち、1917年における深い社会的対立の存在を最大の基準にして考えることは適当ではない。第一次大戦の決定的な影響の下でのみ、1917年は「二月革命」にせよ「十月革命」

にせよ、実際にそうであったような展開をたどりえたのである。だが、これだけの考察であれば、リベラル史観の見解とそう変わりはなく、ロシア革命はロシア史の展開の「自然な」コースからの逸脱として終わってしまうであろう。リベラル史観の限界を克服するためには、第一次大戦をそれ以前の時代と切り離すのではなく、大戦前、大戦、そしてその下で生まれたロシア革命（1917年だけでなく、続く数年間をも含む広い意味での）を、同じ一つの歴史過程の中に位置づけることが必要となってくるのである。

第一次大戦に先行する時代の大きな特徴のひとつは、(少なくとも欧米諸国において)大衆が政治世界に進出してきたことである。ロシア帝国においても、教育の普及が大衆政治状況を準備するのに少なからぬ役割を果たしていたし、労働運動の国家との衝突も労働者の政治意識をはぐくむという結果を伴っていた。大戦の勃発は、政治において大衆が占める潜在的な役割を、急速に高めた。とは言えロシア帝国には、政治への大衆の参加を公的に承認するような制度が欠如していた。この状況を破ったのが「二月革命」であり、これによって政治は大衆と彼ら自身の諸機関に解放されたのである。この意味で、ソヴィエトという制度は大衆政治状況への大衆の側からの対応であったと言える。

ところで1917年を通じてソヴィエトは、単に大衆の意志を表明する回路にはとどまらず、実質的な行政機能をも行使するようになった。これは、政府の機能が混乱し低下した際にも、社会が社会として機能し続けることを保証するような、何層もの社会的ネットワークが当時のロシアには存在していなかった結果である。それはすなわち、社会の組織化が(同時代の欧米諸国のようには)進んでいなかったということでもあるが、この社会の組織化の進展こそは、大戦前から続いている大きな歴史的傾向のひとつであった。第一次大戦が総力戦に転化したのは、諸交戦国においてかなりの程度まで組織化された社会がすでに存在していることが、前提条件となっていた。諸交戦国において国のリソースを最大限に活用できるような状態にあったなればこそ、戦争の総力戦への転化が現実のものとなったのである。また、大戦自体によってこの組織化は大いに促進された。

したがって、ロシア各地におけるソヴィエトの成立は、それまでロシア帝国においてそうであったよりも、はるかに組織化の進んだ社会を生み出す足場をもたらしたと言えよう。たしかに、1917年の緩やかに結びついた全国的ソヴィエト体系は、その後の規格化されたソヴィエト体系とは大きく異なっている。だが、ポリシェヴィキの権力掌握後、ロシア社会の新たな骨組みとなった全国的ソヴィエト体系（およびそれと重なりを見せる共産党全国組織）は、1917年にその根源をもっているのである。

こうしてソヴィエト体系を軸として、ソヴィエト・ロシアは体制に大衆政治状況を取り込み、社会の組織化を高度化するという、相互に密接に関連する二つのメタモルフォーゼをとげた。これは大戦以前から世界規模で進んでいた潮流の、ロシアにおける帰結であった。第一次大戦の総力戦としてのありかたもこの潮流に規定されていたのだが、一方でこの潮流は大戦によって加速されたのである。また、経済の計画化についても同じことが言える。計画経済という考えは、イギリス的な自由主義経済体制への対抗として、とくに19世紀後半のドイツ、さらに遅れてロシアにおいて展開した。社会の高度の組織化を追求するという意味では、これもまた大戦前から続く大きな傾向の一部となっているのである。第一次大戦は計画経済という概念に大きな影響を与えつつ、その展開を促進した。ロシア

においてはボリシェヴィキがこの考えを引き継ぎ、その実現者となったのである。

以上に述べたことから、ロシア革命と第一次大戦の関係は二重になっていると言えるであろう。まず1917年自体における動向は、大戦によって決定的に規定されていた。だが1917年に起こったことは、ロシア史の「自然な」コースからの逸脱ではありえない。なぜならば、広い意味でのロシア革命と第一次大戦とは、大戦前の時期をも含む大きな時代の中にも存在しており、ある大きな歴史的傾向の同じ刻印をともに受けているからである。この意味でロシア革命は、第一次大戦と同様に時代の子どもである。

アクトンは、「古い神話はなかなか滅びない」という言葉で本書を結んでいる。だが、リヴィジョニストの立場から伝統的な諸潮流を批判しているだけでは、リヴィジョニストの研究をも含むロシア革命研究の総体を、より深めていくことはできないであろう。今日ロシア革命の研究をおこなう者には、リヴィジョニストの限界を克服することこそが求められている。すなわち、「下から」の視点と俯瞰的な視点とを統一的に追求する努力が、これまで以上に必要とされているのである。

— 注 —

- 1 J. Keep, "October in the Provinces," in R. Pipes (ed.), *Revolutionary Russia*, Cambridge, Mass., 1968, pp. 186-190; R. Pethybridge, *The Spread of the Russian Revolution: Essays on 1917*, London, 1972, p. 203.
- 2 あえて強調しておくが、評者はけっしてリヴィジョニストのすべての研究が長期的展望を欠いていると言っているのではない。1917年を扱いながら長期的展望をも考察した好例として、M. Ferro, *October 1917: A Social History of the Russian Revolution*, trans. N. Stone, London, 1980 をここでは挙げておきたい。なおアクトンも、フェロの研究が占める例外的な位置について註の中でふれている。